

さ 寝 考

岩 崎 良 子

はじめに

『万葉集』には、「寝」に接頭語「さ」のついた「さ寝」ということばが、多くは恋の歌に詠まれている。「さ寝」の歌の巻別分布は左表の如くである。

巻	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
0	1	2	1	1	1	1	0	2	0	2
5	1	0	0	12	4	1	0	0	0	1

表にあきらかなように、「さ寝」の歌は巻十一・十四・十五に集中しており、全三十三首中、「さ寝」が共寝を意味していると解することのできる歌は二十五首、形見と共寝することを意味しているもの二首、恋人に想いを寄せながら一人寝る歌六首である。しかし、「さ寝」

が共寝以外を意味する歌については後に「さ寝の詩的展開」で述べるように、「さ寝」ということは詠まれた場の変化が原因していると考えられる。

これに対して、「寝」の歌は集中に約百九十首を数えることができる。それらの「寝」の意味を分類してみると、共寝を意味する歌約七十首、恋人に想いを寄せながら一人寝る歌約九十首、その他約三十首である。その他三十首の多くは旅寝の歌で占められている。「寝」は、「さ寝」のように共寝に限定されない、共寝・一人寝・旅寝などを意味することばである。

接頭語「さ」に限らず、接辞についてはどの注釈書も「接辞」と指摘するのみで、その意義が明確にされていない場合が多い。ここでは、「さ寝」ということばが「さ」という接頭語を付されたことで「寝」とどのように

違うことばとなったかについて、接頭語「さ」の意義・「さ寝」の歌の意義両面から考えてみたい。「さ寝」は本来共寝をいうことばであったのではないか、又どのよ
うな場においてつかわれたことばであったのかという事
に興味の中心を置いて論を進めてみたい。

(一) 東歌の「さ寝」と歌垣

「寝」の歌約百九十首中、共寝をいう「寝」の巻別分
布は左表の如くである。

巻	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
卷	0	8	0	2	0	1	2	0	1	3
8	9	4	25	0	2	1	0	1	0	0

右の表は、民衆歌に多いという点において、「さ寝」
の巻別分布にはば一致する。対して、一人で妹や夫を想
う「寝」の歌は、巻十一（十五首）巻十二（十二首）巻十
四（七首）で、共寝をいう「寝」や「さ寝」の歌が、東
歌に集中しているのとは対照的に、都の民衆歌により多
く見られる。共寝と一人寝という主題において、都の民
衆歌と東国の民衆歌とは比率が逆転している。又、興
味深いことに作者の男女比について、共寝を意味する
「寝」や「さ寝」の歌では圧倒的に男性作者が多いのに

対し、一人寝を意味する「寝」の用例ではおよそ半々で
ある。共寝を意味する「寝」や「さ寝」の女性作者によ
る（と考えられるものを含む）歌は総て民衆歌で、我々が
万葉の女性歌人として認識している誰も、共寝を意味す
る「寝」や「さ寝」の歌は詠んでいない。これらの事
は、共寝という主題が民衆のものであり、女性よりは男
性の主題であったことを語ってくれている。

『万葉集』の「さ寝」について、多くの古注釈は「さ」
は発語で、寝との違いはないとしている。中で、本居宣
長『万葉集東歌僻説評』鹿持雅澄『万葉集古義』橋本直
香『上野歌解』（以下『僻説評』『古義』『歌解』と略す。）が
次のような見解を述べている。

『僻説評』

さぬる。妹ト二人寐ル事ヲ、専ラサヌルトヨメリ、
コ、ハ妹トハ不寐也。但妹ト二人サヌル夜ハナシ、
タ、妹ヲ思ヒツ、一人、寐ヲスルヲ云意歟。依テ
思フニ、第十一ノ三十丁ウ、はしきやしふかぬ風ゆ
ゑ玉くしけひらきて左宿之われそくやしきトアルヲ
証拠ニシテ、一人寐ヲモ然ヨム例アリトセン歟。
（十四・三五〇四）サヌルハ真ヌルニテ、ヨクウマク
眠ル事也。故ニマツハ妹トナル事ニヨメリ、サレド
此ノ歌ノ如ク、一人ニテモウマクナル事ヲ云ル例

ハ、ナホアルヘシ。(十五・三六二六)

『古義』

佐奴良久波は、夫妻共相寐ツマドモトモすることは、と云が如し

(十四・三三五六)

佐祢乎佐祢氏婆は、相寐をだに為たらば、心にあき足む、となり(十四・三四一四)

『歌解』

佐祢乎佐祢氏婆。此ノ佐祢の佐は発語に非ず。指寝の心にて男女互に手を指交て寝る由也。神代卷、御歌に、おきつものはへにはよれども佐祢耐抛茂、古事記、軽太子の、宇流波斯登、佐泥斯佐泥弓婆とあるなどを初として此詞いと多。

二ノ卷、玉匣将見円山乃狭名葛佐不寐者遂尔有勝麻之目、十に七夕歌、玉葛不絶物可良佐宿者年之度尔直一夜耳、七卷に、袖指代而佐寐之夜也、五に摩多麻提乃多麻提佐斯迦閉佐祢斯欲能、などはらにて知べし。男女相寝ツマドモる時に限りたる語にて、常に寝るを佐祢と云し事なし。四ノ卷、余衣形見尔奉布細之枕不離卷而左宿坐、とやうによめるもあり。こも吾と思ひてさし抱てねよといふにて、心は同なり。

(十四・三四一四)

右に宣長が、一人寝の論拠として掲げている卷十一・

二六七八の歌は、共寝と解する注釈書(注し)も多い。又、宣長

が二六七八を論拠として一人寝であるとした三五〇四に

ついては、わずかに折口信夫(注し)が共寝であるとしている。ここで、冒頭の表にもあきらかなように「さ寝」の歌がもっとも多く集中している東歌十二首を列挙してみよう。

- 3358 さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢のごと
- 3366 ま愛しみさ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満つなむか
- 3396 小筑波の繁き木の間よ立つ鳥の目ゆか汝を見むさ寝ざらなくに
- 3414 伊香保ろのやさかのゐでに立つ虹の現はろまでもさ寝をさ寝てば
- 3461 あぜといへかさ寝に逢はなくにま日暮れて夕なは来なに明けぬしだ来る
- 3466 ま愛しみ寝れば言に出さ寝なへば心の緒ろに乗りて愛しも
- 3489 梓弓欲良の山辺のしげかくに妹ろを立ててさ寝処払ふも
- 3504 春へ咲く藤の末葉のうら安にさ寝る夜そなき児ろをし思へば

3522 明日香川下濁れるを知らずして背ななと二人さ寝て
悔しも

3556 潮舟の置かればかなしさ寝つれば人言繁し汝をどか
もしむ

以上十二首の歌の中で、多くの注釈が「さ寝」を共寝としないのは、先に述べた宣長のいう三五〇四のみで、他は総て共寝と解釈されている。三五〇四の「さ寝」を共寝であるという折口は次のように述べている。^(注3)

さは、特別の意義のあつたらしい接頭語。さぬは、共寝の意味に常に使つてゐる。其点ぬ、(ぬる)の漠然としたのとは違ふ。(三三五八・記八十)

さぬは、一人寝ることではない。必、抱き寝することである。(三五〇四)

右に掲げた他にも、折口は「さ寝」について総て「共寝である」と折にふれ主張している。^(注4)民衆の恋の歌において大きな主題の一つとなつてゐることに、共同体を等しくする人々に、恋の事実を知られるか否かという人言の問題がある。十二首の「さ寝」の歌の中にも、「現はるまでもさ寝をさ寝ては」寝れば言に出」などのことばがあることから、又、「さ寝」の歌の多くが共寝の喜びをうたつてゐるのではなく、共寝のかなわぬ、かなつたならかなつたでその後の悲しさをうたつてゐる

歌であることから、私は折口が三五〇四を共寝であるとするのを支持したい。三五〇四が共寝であるとするならば、東歌の「さ寝」は総て共寝を意味していることになる。

古注釈の先に掲げた三例以外、加えて近代以降の主な注釈も、「さ寝」の「さ」は単に発語・接頭語とするのみで、「さ寝」についての言及は見られない。「さ」を単に発語とする注釈の多くは、短歌の音韻上の問題から「さ」が加わつたとするが、単に音韻上の問題であるならば、「さ寝」ではなく「率ぬ」や「寝ぬ」でもよかつたはずなのだ。枕詞を括弧でくくつて、その意義について考察しない姿勢が批判されるべきであるのと同様に、接辞を単に接辞であると指摘するにとどまる姿勢も考え直されるべきである。従つて「さ寝」がどのような意義を持つ語かということについても、接頭語「さ」の意義を無視して考えることはできない。

ところで、「さ寝」の接頭語「さ」は、他にどのような語に付されているだろうか。「さ寝」の性質をあきらかにする為を考えてみなければならぬ。

『万葉集』における接頭語「さ」の用例は、巻一「さ野榛」一例「さまねし」二例、巻二「さ寝」二例「さ夜」一例「さもらふ」二例で、他巻に比べて少ないが、巻

一・二以外の巻では数の上では平均して用例が見られる。共寝をいう「さ寝」の歌が多く集中している巻十一・十四における接頭語「さ」の用例を比較してみると、巻十四では、「寝」以外の語についた「さ」の用例が極端に少ないことに気付く。「さ夜」一例「さ衣」一例「さを鹿」一例「さ緒」一例、計四例が巻十四における「寝」以外の語についた接頭語「さ」の用例である。これに対し巻十一では、「さ渡る」一例「さ根延ぶ」一例「さ丹」一例「さ織」一例「さ夜」二例「さもらふ」二例「さね葛」一例で、巻十四ほど用例は「さ寝」に集中していない。ただし、両巻とも比率の多少を別にすれば、「さ寝」が接頭語「さ」の用例の一位を占めるといふ点においては一致している。

東歌の「さ衣」「さ緒」は次のような歌の中に詠まれている。

3536 赤駒を打ちてさ緒引きいかなる背なか吾許来むといふ

3394 さ衣の小筑波嶺ろの山の崎忘れ来ばこそ汝を懸けなはめ

「さ緒」は集中右の用例一首のみ、「さ衣」はもう一首巻十三に、

2866 人妻にいふは誰が言さ衣のこの紐解けといふは誰が

言

と詠まれている。

「さ」の冠せられた衣や緒は、古代の人々にとり、どのような意義を持つものであっただろうか。

多くは旅にあって、衣の紐を解かず眠ることをいうことばに「丸寝」がある。紐は愛する妹が結んだ紐で、そうした衣のまま眠ることは、旅にあって不安定な状態にある靈魂を、安定させたいという願いに基づいた行為である。「赤駒のさ緒」と詠まれている「さ緒」は、「さ衣の小（緒）筑波嶺ろ」と詠まれ、更に「さ衣」は二八六六に恋人が紐解く衣として詠まれている。衣も緒も、古代人の靈魂信仰にかかわる大切なものであった。「さ寝」の「さ」も、衣や緒と同様に靈魂の問題にかかわり付された接頭語であろう。眠りは現代においてさえ、人間のもっとも無防備な状態であるけれど、古代の人々が「眠り」を靈魂の不安定な状態として捉えていただろう事は容易に推測できる。手をさし交え眠る＝共寝は、「眠り」という不安定な靈魂を安定させる為に必要な行為であったのだろう。共寝をいうことばであったらう。「さ寝」の「さ」は、靈魂の充実にかかわる共寝という行為の意義の下に付せられた接頭語であろう。

東歌には、古くから伝承されてきたと考えられる東国

ぶりの歌もあり、卷十一に对等するような新しいことばの用例も多い。例としてあげた「さ寝」の歌十二首は、地名を含む歌七首（或いは八首とも）を持ち、うち勸国歌は三首である。又、中には三三五八のように、或本・一本と類型を等しくする別歌を持つものも含まれている。

これらの歌は、東歌が『万葉集』において新しい時代の歌を集めたものだとしても、国ぶりの歌としての歴史を持つ古くからの歌謡であったらうと考えられる。集団の場において、広く東国の民衆に親しまれ、愛唱され続けてきた恋の歌謡の原形を留めている歌であろう。どの歌からも口誦のものであったらしい伸びやかな旋律を鑑賞することができる。「さ寝」は、歌謡性を濃厚に残す歌に詠まれているが、先に「さ衣」「さ緒」についてあげた三三九四は常陸国の歌、三三五六・二八六六は、共に集団の場において歌われた歌謡の俤を留めている歌である。^(注7) それでは、東歌の「さ寝」の歌や「さ衣」「さ緒」が、集団で歌われた場とは具体的にどのような場であろうか。まず第一に考えられるのは歌垣であり、次には集団労働の場である。

ところで本居宣長は、『古事記』須佐之男命御啼伊佐知の段の「狭蠅如す」について次のように述べる。^(注8)

狭蠅は、書紀の字の如く、五月ごろの蠅なり、然る

を佐都伎といはで、佐とのみ云は、田植の農業を、凡て佐と云ふ、その苗を佐苗、植る女を佐少女、植始むるを佐開、植終るを佐登など云が如し、さて又其業する月を佐月と云ふ、其頃の雨を佐乱と云なり、かかれば、狭蠅も、田植ころの蠅と云意の称なり

右の宣長の説は、折口信夫・高崎正秀等によって継承されているが、西郷信綱氏はやはり「狭蠅」について宣長説を引いた後で、「播磨風土記揖保郡枚方の里の条にのせる次の説話も、これと関係する」として次のような説話を引用している。^(注9)

佐岡 佐岡と名づくる所以は、難波の高津の宮の天皇のみ世、筑紫の田部を召して、此の地を墾らしめし時、常に五月を以ちて、此の岡に集聚ひて、飲酒宴遊しき。故、佐岡といふ。

これらの「さ」は、田植えの行事に関連する「さ」であるが、折口信夫は、「さ丹」「さ月」「五月夜」「五月蠅」「さ苗」「さをとめ」の「さ」は総て田植えの行事に関連する「さ」であろうと述べている。^(注10)

更に高橋正秀は折口の説を發展させ、「神楽と神楽歌―さ音考」の中で玉依姫・狭依姫の呼称について、「玉は神霊で、依はそれが人に憑ることである。さすれば、さより姫も之に準じて解釈が出来、延いてはさそのもの

の意義にも、何らかの解決の曙光が射すかも知れぬ」と述べ、「⁽¹¹⁾」についての考察を試みている（さ。そのもので接頭語「さ」に限らない。）高崎正秀は、「み吉野の吉野」「み熊野の熊野」に対する「さ檜の檜限川」を例にさにま・み・たまに通う神聖感があるとし、更に宣長・折口のいうさ苗・さ処女・さ月・さみだれ・さばへを拠にさは稲の義であったかもしれないと論を發展させている。古くは『古義』が、接頭語「さ」について「真に通ふそへことば・美称」であるとし、「さ音考」はそれに宣長・折口のいう「田植えのさ」を加え、さを稲の義かと推論するわけであるが実証は得られていない。

ま・み・たまはいずれも美称であるが、それらは古代においてどのような意義を持つことばであったのだろうか。古代における靈格を示すことばについて論じた倉野憲司氏は「言霊の日本の特性」において、^(註12)

古代日本人は、一般に靈的なものを言ひ表わす言葉として、「タマ」と「チ」との二語を有してゐた。

換言すれば、「タマ」と「チ」とは古代日本人の宗教的表象としての靈魂・靈質、もしくは靈威の觀念を示す語であつたのである。コトダマ・イナダマ・コダマ・フナダマ・フツノミタマ等は前者の例であり、ミツチ・ヨロチ・イカヅチ・ククノチ・ヌヅチ・

アシナヅチ等は後者の例であるが、タマとチとの間には宗教表象的層位は認め難い。両者は同一觀念を表示する語に他ならないのであるが、かやうに同一觀念を表はすのに二つの異なつた様式の存してゐることは、両者が本来系統を異にするものであることを推測せしめるのである。

と述べ、『古事記全註釈』においてミ・ヒを靈格を示すことばの中に加えている。又、西郷信綱氏は「靈格の諸相」^(註13)において「ノツチ・ククノチのチ、ヤマツミのミ、タカミムスヒのヒ等、すでにこれまでさまざま靈格が登場した。さらにタマ、ヌシ、カミ（神）なども同類と見ていいのだが、さてこれらがいかに等級づけられているかがよく分らないのである」と述べる。これらの靈格を示す語は神名に多く用いられ、それが靈を有する物につけられ、やがて後世では單なる美称となるのであるが、美称のそうした性格を考える時「さ」も靈格を示すことばに準じたことばであつたのではないかと疑われる。「サ」を含む神名には、天之狹土神・国之狹土神・天之狹霧神（国之狹霧神）・天之狹手依比売・猿田毗古神等があり、天の真名井のうけひにおける狹霧がある。これらの「サ」が意味のない接頭語であるはずはなく、日本思想体系『古事記』は天之狹土神の神名について

「サは神聖さをあらわす接頭語」であるとしている。

「サ」を靈格に準ずる語、且稲に関連のある語とした場合、タマやミと同じように靈物に付される語、やがては美称となるような資格があるだろうか。

天忍穂耳命・天津日高日子番能邇々芸命・天津日高日子穗々手見命の「ホ」について西郷信綱氏は、

……「火」であったものがここで突如「穂」に轉換していつているのに注目せねばならぬ。これはむしろ「ホ」音による轉換だが、しかしたんにそれだけではない。焔は「火の穂」である。そして穂は秀であり、目に立つもの、秀いでたものをいう。……瑞穂の国の君たるべき資格をあらわす名にほかならない。

と述べている。^(注15)つまり先の三神の名における「ホ」は稲の豊饒であることをもって神を讃えているのだと考えられる。又、稲の豊饒を表わす「豊」、植物の生命力を讃えることばである「瑞」は、豊野雲神・豊宇氣毘売神・豊玉毘売・水穂之真若王・水穂五百依比売などの神名・人名に度々美称として付されている。「豊」も「瑞」も、西郷氏の述べる「ホ」と同じ意義をもって神名・人名に付された讃めことばであろう。両者とも稲に關して発生した美称であるが、やがて稲や植物には直接關係し

ないが神聖な物、「瑞の御舎」(六月大祓祝詞)「瑞玉盞」(記一〇〇)「豊御酒」(記・五二〇一)「豊寿く」(記三九)などに美称として付されるのは、タマやミと同様である。古代における稲の威を考えれば、「サ」は稲に關連した靈格に準ずる語としての資格を充分に持ち、靈物に神聖な物に付される接頭語から、単なる美称になつていく資格も持っている語であると考えられる。

話を元に戻せば、「さ寝」の「さ」を前述の「サ」に重ねて考えてみると、東歌の「さ寝」十二首の集團歌詠の性格と「サ」の性格から、「さ寝」の原義は農耕の予祝儀礼である歌垣において共寝をいうことばであつたのではないかと考えられる。しかし、「さ寝」の原義が歌垣における共寝であるといつても、「さ寝」はいつまでもその原義のみを負つて詠まれているのではない。靈格のことばであるタマやミが、後世では單なる(極端に言えば単に修辭上のみの)美称となつていくような「さ」の変化に伴つて、靈魂の不安定な丸寝に對して靈魂の充實した眠りである共寝を尊ぶ意識を以て、ただ「寝」というのではなく「さ寝」というのである。折口が田の行事に關連のあるとする「さ夜」、或いは「さ夜」「さ寝」と並んで集中に多くの用例を見る「さを鹿」なども、元は何らかの形で田の行事・稲と關連のあるところから「さ」

を付されたものが、畏怖の対象としての夜、賛として神聖な動物であった鹿として「さ」を付されるようになっていたのではないかと推測される。

(二) 記紀歌謡の「さ寝」

次に記紀歌謡の「さ寝」或いは接頭語「さ」がどのような意義を以て詠まれているか考えてみたい。

記紀歌謡の中には、「さ寝」の歌が、床と結びついた「さ寝床」も含め三首あり、それらの「さ寝」は総て共寝を意味することばとして用いられている。

(A) 記二七 倭建命

ひさかたの 天の香具山 とかまに さ渡る鶴 ひ
は細 たわや腕を 纏かむとは 吾はすれど さ寝
むとは 吾は思へど 汝が着せる 襲の欄に 月立
ちにけり

(B) 紀四 瓊瓊杵尊

沖つ薬は辺には寄れどもさ寝床も与はぬかもよ浜つ
千鳥よ

(C) 記八十 木梨軽太子

愛しとき寝しさ寝てば刈薦の乱れば乱れさ寝しさ寝
てば

(番号は、岩波・日本古典文学大系『古代歌謡集』によ

る。)

A歌は、熱田大神宮に関わりが深いかと考えられる美夜受比売に求婚する東征後の倭建命の歌であるが、この結婚後、倭建命は草那芸剣を美夜受比売の許へ残し、能煩野での臨終を迎える。単純に、この物語に密着した歌謡であるとは判断し難い部分を持ち、一次的な構成を持つとも考え難い歌であるが、歌の眼目が「さ寝むとは」以下にあることは、題材の特異なことからも間違いないだろうと考えられる。

美夜受比売の呼称について、「(註)宮主」、「ミアハズヒメ」

(見合はず)等の解釈があるが、神の女と共寝をしたとしても、月立てる女と共寝をしたとしても、それは禁を犯したことを意味しているのだろう。倭建命臨終の前提として、禁を犯すことの必然性と、歌の特殊な題材とが結びついたと考えられる。

西郷信綱氏は、この歌謡について、

この歌にかんするかぎり、ヤマトタケルを八浪漫的Vとはとても呼べない。いや古典的でさえなく、露骨で野性的なことでは、かの八千矛の神を中心とする歌謡に一脈通ずるものがあるといえる。「吾が著せる」(金18)というように一人称に敬語を使っている点も共通しており、また饗宴のときの歌である点も同

じである。……この歌も饗宴のさい滑稽猥雑な所作を以て演じられたものに相違なく、とりわけ、「うべなうべな、君待ち難に」あたりには、そういった趣が濃厚である。饗宴用のこうした古い歌劇風の歌謡は、万葉集卷十三などにもなおその伝統をとどめており、それがミアハズという言葉を回路にミヤズヒメ説話の一部としておびきよせられるに至ったの
だろう。^(注19)

ところでA歌には、「さ寝」の他に接頭語「さ」がもう一例、「さ渡る鵠」とつかわれている。「久毗」については『古事記伝』以降諸説あるが、オオハクチョウの古称とするのが定説である。「さ渡る」は、鵠の他に谷麩(万葉集・祝詞)月・霍公鳥・たかべ(万葉集)雲(風俗歌)などを主格とする語であるが、月・鳥類・雲はいずれも古代の人々が神聖視し、畏怖していた尊い存在であった^(注20)だろう。とりわけ、鵠は、倭建命が死して化したオオハクチョウである。「さ渡る」の接頭語「さ」は、(一)に述べた「サ」の性格からも、付された物の性格からも神聖な物に対して付された語である。

『万葉集』卷十三は、宮廷の古歌謡を集めたことされる一巻であるが、集中で接頭語「さ」の用例のもっとも多

い長歌を載せている。

3310 隠口の 泊瀬の国に さ結婚に わが来たれば た

な曇り 雪は降り来 さ曇り雨は降り来 野つ鳥

雉はとよむ 家つ鳥 鷄も鳴く さ夜は明け この

夜は明けぬ 入りてかつ寝む この戸開かせ

右は、八千矛の神を中心とする歌謡としばしば比較される歌であるが、「さ結婚に」は「さ寝むとは」に意味の通ずることばであり、八千矛の神を中心とする歌謡にも「麗し女をありと聞こしてさ結婚に」とうたわれている。風俗歌に「さ渡る」とうたわれている雲が「さ曇り」「共寝する夜を「さ夜」という。ここでも、やはり「さ」は、神聖な対象に付された接頭語であり、その「さ」を集中ももっとも多く用いている歌は古歌謡ともよばれる歌である。この歌は、反歌一首を持ちその次には、「隠口の泊瀬小国によばひせすわが天皇よ……」と、天皇の求婚歌謡であるような形をとって長歌が続く。三三一〇・三三一一は天皇の求婚歌謡ではないけれども、この歌謡が成立する段階において、そうした歌謡との混同が行われた可能性は充分にあるだろう。記紀歌謡の「さ寝」は二首迄が天皇の求婚歌謡としてあり、八千矛の神を中心とする歌謡や卷十三の歌と併せて考えてみると、A歌の「さ寝」は、歌垣の歌謡のことばであったものが天皇

(又はそれに準ずる人)の求婚歌謡に取り込まれたことばであるかと考えられる。A歌は、西郷氏の言及するよう
に、「饗宴のさい滑稽猥雑な所作を以て演じられたもの」
であっても「さ寝むとは」「さ渡る鶴」の「さ」は、先
に述べた「さ」の意義からもこの歌謡の饗宴の特質と
は、口誦の歌における接頭語の音楽上の問題以外の面
においてかかわりのないことばである。

B歌は、木花開耶姫が妊娠について疑われたことで、
瓊々杵尊を恨んでうちとけないのに対し尊が詠んだ歌で
ある。「さ寝床」は言うまでもなく共寝の為の床のこと
で、先に述べた東歌の中には同じ意味につかわれている
「さ寝処」があった。

紀歌謡の中には、磐之姫が仁徳天皇と八田皇女の間を
嫉妬して、

衣こそ二重も良きさ夜床を並べむ君は恐きろかも
とうたっており、歌の主題とするところは異っている
が、「沖つ藻」「衣」を各々寄物陳思的に、訴えようとす
る感情に転じている点において類似の構成を持つ歌であ
る。「さ夜床」は仁徳天皇と磐之姫、仁徳天皇と八田皇
女が各々共寝する床を指している。夜の大殿の床を尊ん
でいった表現であろう。大殿の床を尊んだ表現の背後に
は、天皇の結婚に対する神聖さ、共寝そのものの尊さが

含まれている。又、床についた美称の用例には「玉床」
があり(二一六・二〇五〇)いずれも共寝の為の床に付き
られている。「さ寝処」「さ寝床」「さ夜床」の「さ」は、
これらの場合「玉」に通うところの接頭語であるとも解
せられる。

C歌は、木梨輕太子・輕大郎女の悲恋物語中の歌謡
で、この歌謡には「夷振之上歌」、又この前に位置する記
七八については「志良宜歌」と注記のあることから、
これら一連の歌謡が純粋な物語歌ではなく独立歌謡であ
ったことがうかがわれる。一連の歌謡の中には、琴歌謡
に残されている歌も含まれ、宮廷において古くから、例
えば楽府や雅楽寮のような、宮廷に伝わる歌曲を管理す
ることを職掌とする人々によって伝承されてきた歌だと
考えられている。土橋寛氏は、やはり「夷振」と注記の
ある紀三「：目ろ寄しに：」の「ろ」について、これを
独立歌謡とした上で、「子ろ、家ろ、嶺ろなど、『万葉』
の東歌や防人歌に用例が多い」と指摘し、この歌を「お
そらく水辺の歌垣の誘い歌であろうと思われる」又、C
歌について『乱れば乱れさ寝しき寝てば』の句は、輕太
子と輕大郎女との間柄にふさわしくない。会った後、再
び会えないかも知れぬ相手への恋情を歌っている点から
も見て、あるいは歌垣の歌かもしれない」と述べてい

(注²²)
る。A・B・C歌は総て独立歌謡と考えられ、天皇の、

もしくは天皇に準ずる立場にある人の恋愛物語に取り込まれているが、そうした歌に至るこれらの歌の元の姿がどのような性質を持つものであったかを考えてみる必要がある。A歌「さ寝むとは」以下の詞章、又他の歌も土橋氏が指摘するように、歌垣の場において歌われた恋の歌謡であったらう。そして、これら記紀歌謡の「さ寝」の原性質は『万葉集』に残された歌の中では、東歌の「さ寝」と同質のものである。先に掲げた東歌の「さ寝」には、歌垣の場においてうたわれたとされる三四八九、更に歌垣において即興にうたうことができるような、広く流布していたと考えられる恋の歌謡も多い。歌垣は、元来農耕儀礼に密接な繋がりを持ち、豊饒の予祝儀礼としての意義を求めることのできる行事であった。だとすれば、これら歌垣の歌謡が天皇の求婚・恋愛物語に取り込まれたことはごく自然な結果で、後の大嘗祭における聖婚儀礼に継承されていくような意義を、「さ寝」の歌謡にまつわる天皇の結婚に求めることも可能である。

(三) 「さ寝」の詩的展開

東歌と記紀歌謡の「さ寝」は総て共寝を表わすことば

であったけれど、『万葉集』の「さ寝」が総て共寝を表わすことばなのではない。『万葉集』という限られた資料の中だけで「さ寝」の展開を捉えることは、或いは意味のないことであることを覚悟しながら、作者判明歌の「さ寝」には明らかに展開と呼べるような変容が見られるので、制作年次が明記されている歌、又は推定可能な歌を追うことで「さ寝」の変化を考えてみよう。

「さ寝」の作者判明歌の中で、一番古いところに位置するのは次の二首である。

94 玉くしげみむまど家のさなかつらさ寝ずはつひにありかつましじ

135 つのさはふ 石見の海の……玉藻なす靡き寝し児を深海松の 深めて思へど さ寝し夜は……

一番古い二首と言っても、二首の間にはおよそ二十年以上の隔りがあるだろうと考えられ、正確には九四・鎌足の歌を一番古い一首として捉えておくべきかもしれない。両歌とも「さ寝」は共寝を表わしている。鎌足歌がや「さな葛」までを序として「さ寝」といい、「遂にありかつましじ」という語調の強さによって直截に感情を表現しているのに対し、「三五・人麻呂歌では「玉藻なすなびき寝し児」の美しい譬喩と共に「さ寝し夜」と回想の場面が描かれており、鎌足歌の直截さは感じとること

ができない。鎌足が、現実の事として「共寝せずにはいられないだろう」と詠んだのは、序の在り方と共に、記紀歌謡・東歌に近い特質を感じさせる。一方、人麻呂歌では、おそらくは再び会う事のない石見の妻との生活を回想する中で、「さ寝」は修辭的に美しい表現を得て、元來持っていたと考えられる民衆性を脱して詩のことばとなっている。中西進氏は『柿本人麻呂』において、

「人麻呂の恋歌が地下の民衆歌に近い」こと、又、人麻呂歌集の民衆歌について「人麻呂の接し得た国々の民衆歌は、少しずつ語句のずれをもちながら、東歌とも連続するものだった」と指摘される。^(注24)「さ寝」もそのようにして地下のことばとして人麻呂歌中のことばとなったのだろう。しかし、人麻呂の「さ寝」はその詩の中で最早地下のことばではなくなっている。再びかなうことのない石見の妻との過去における共寝^{II}限定された共寝として「さ寝」はあり、この歌を享受する側の問題はともかく、集団性というものから遠く離れた個の問題にかかわる「さ寝」となっている。

続く神龜年間には、次の二首がある。

940 印南野の浅茅押しなべさ寝る夜の日長くしあれば家
し偲はゆ

804 世間の術なきものは 年月は 流るる如し……少

女らが さ寝す板戸を 押し開き い通りよりて
真玉手の 玉手さし交へ さ寝し夜の 幾許もあら
ねば……

九四〇・赤人歌は、「播磨国印南野行幸」の時に作られた長歌の反歌三首中二番目の短歌である。歌中の「さ寝」は共寝を意味することばではない。

一般に行幸反歌の特質は、望郷の念をうたうことと、行幸の地において座をもちたてる滑稽の要素であると考えられる。赤人以前には鎌足・人麻呂の「さ寝」があり、更に古くは歌垣のような場においてうたわれた「さ寝」がある。赤人が「浅茅押しなべさ寝る」とうたった時、その場の人々は共寝をいう「さ寝」ということばに唐突な印象を受けたであろう。その場にあつた人々の意識には、あの軽太子物語の「さ寝しさ寝てば」などにおける共寝を表わすことばとしての「さ寝」の印象が強くあり、赤人の用語に意外さを感じただろうと想像される。すれば、「さ寝」は、妻や家を喚起させずにはおかなかつた筈だ。それは共寝を希求する気持を含み、望郷の念を表現した旅の寂寥故のことばであり、「さ寝」は初めて愛する人に思いを寄せて一人寝る夜を表わすことばとなった。このような相聞性の濃厚な行幸反歌は、九四〇にとどまらない赤人の行幸反歌全般に見られる特

質である。又、「さ寝る」とは言ったものの、現実には浅茅押しなべ寝ていると、赤人は滑稽を感じさせるつもりでうたったのかも知れない。それを「日長くしあれば家し慰はゆ」と結んだ時、滑稽は忘れ去られ、人々の胸には望郷の想いが去来したであろう。赤人の「さ寝」は、行幸反歌の持つ二面の特質から理解されるべきことばである。

八〇、憶良の歌は、先にも触れた八千矛の神を中心とする歌謡の影響を受けていると考えられる「哀世間難住歌」である。記の「寝すや板戸を」が「さ寝す板戸を」に、同様に「玉手さし纏き睡は寝さむ」が「玉手さし交へさ寝し夜」に変化している間には、「さ寝」ということばの変容があるように思われる。憶良が影響を受けている記歌謡はいずれも、殊更に記二・三は、官能的な歌である。これらの記歌謡に「さ寝」ということばはないけれど、「さ寝」の元来持つ共寝の印象と、記二・三の官能性が重なり合って「さ寝」と表現され、八〇四では若い生の象徴となっている。生々しくも思い起こされた恋の姿であり、最早憶良の記憶の中だけの若き生の残照であろう。「少女らがさ寝す」の少女は共寝をしているのではない。恋人の訪れを待ち侘びて眠ってはいないだろう少女の姿が、戸を押し開こうとする若者の想像の中

では恋の姿と重ってあるのだろう。憶良が表現しようとした若い生は、記歌謡中のことば、或いは「さ寝」ということばによって切実な幻想となり、老いていく・生を終えようとしている・生を受けたこと自体のかなしさを、残酷にも対比的に描くことになった。赤人の「さ寝」が、旅における孤を原点とした家・妻への希求であったのと対照的である。

本来、歌垣の場における歌謡のことばとしてあった「さ寝」に変容と呼べるようなことがあったとすれば、人麻呂・赤人・憶良によって詩のことばとしての位置を与えられたのだと言えるだろう。以下の作者判明歌の「さ寝」は、人麻呂・赤人・憶良の「さ寝」を踏襲・展開させたものである。

続く天平年間には、次の八首がある。

- 3625 夕されば 芦辺に騒き 明けくれば 沖になづさふ
鴨すらも 妻とたぐひて 我が尾には 霜な降りそ
と 白たへの 翼さし交へて 打ち払ひ さ寝とふ
ものを 行く水の……
- 3626 鶴が鳴き芦辺をさして飛び渡るあなたづつしひと
りさ寝れば
- 3735 思はずもまことあり得むやさ寝る夜の夢にも妹が見
えざらなくに

3760 さ寝る夜は多くあれども物思はず安く寝る夜はさねなきものを

1629 ねもころに 物を思へば 言はむ術 為む術も無し 妹とわれ……夕には 床うち払ひ 白樗の 袖さし

交へて さ寝し夜や……

481 白樗の 袖さし交へて 靡き寝る わが黒髪の ま

白髪に 成りなむ極み 新世に 共に在らむと……

吾妹子と さ宿し妻やに 朝には 出で立ち偲ひ

夕には入りる嘆かひ……

636 わが衣形見に奉る敷袴の枕を離けず巻きてさ寝ませ

4394 大君の命恐み弓のみたさ寝か渡らむ長けこの夜を

三六二五・三六二六は、題詞「古挽歌一首」左注、右、

丹比大夫懐愴亡妻歌」を持つ。「さ寝」は三六二五では共

寝を、三六二六では妻を偲んで一人寝ることを表わして

いる。赤人が旅にあつて家や妻を思った「さ寝」が、こ

こでは亡き妻を希求する「さ寝」として詠まれている。

左注の丹比大夫は具体的に誰をさすか不明であるが、丹

比氏は柿本人麻呂との関わりが疑われる名族である。

三七三五・三七六〇は、中臣宅守、茅上娘子の悲恋物

語中の歌で、「さ寝」はいずれも愛する人に思いを寄せ

て一人寝る意味につかわれている。軽太子の悲恋物語に

も「さ寝」の歌はあつたが、共寝を表わす恋のことばで

あつた「さ寝」は、宅守・茅上娘子の物語歌の中にもつかわれている。「さ寝」は強烈な恋の印象を負つて物語の中に取り込まれたことばである可能性も持つ。

一六二九は、家持が坂上大嬢に贈つた歌である。「白樗の袖さし交へて」は、三六二五「白たへの翼さし交へて」四八「白樗の袖さし交へて」「さ寝し夜」は、一三五「さ寝し夜は」八〇四「さ寝し夜の」に各々類句を見出すことができる。一三五・人麻呂、八〇四・憶良は言う迄もなく家持に多大な影響を与えた歌人である。家持の「さ寝」は、これらの影響下にあることばで、人麻呂・赤人・憶良が「さ寝」に詩のことばとしての位置を与えた、そうした試みは行われていない。

四八一は、高橋朝臣の「悲傷死妻歌」で、天平十六年七月二十日の作であるとされる。「みどり子」「つま屋」「なびき寝し」など人麻呂歌との類句を多く持つ歌である。

六三六は、湯原王が娘に贈つた歌で、娘に、私が訪れない夜には私が与えた衣と共寝をなさい、と呼びかけている。形見と共に寝ることを「さ寝」と表現している歌は他にも一首、巻十一に載せられている。

2629 逢はずとも我は恨みじこの枕我と思ひてまきてさ寝ませ

当時、愛しあう者同士が衣など身につけるものを交換し合うのは、恋の習俗として一般に行われていたことで、六三六の衣も、二六二九の枕も恋人の靈魂そのものである。「歌解」に指摘されていたように、「さ寝」は共寝と同じ意義につかわれている。

四三九四は、左注に「右一首、相馬郡大伴部子羊」とあり、下総国防人部領使少目県犬養浄人の提出した二十二首の防人歌の一である。「由美乃美仁」に、解釈の揺れのある歌であるが、「由美」を「弓」、「乃美仁」を元暦校本・類聚古集の「乃美他」、即ち「のむた」の訛りであるとすると、「妻と共に寝ないで、弓と共寝をすることよ」とうたった防人の嘆きの歌である。東国の民衆は、さながら愛する人と共寝をすることを「さ寝」とうたったが、相馬郡の防人は、弓と共寝することを「さ寝」と表現した。

以上に掲げた天平年間に詠まれた「さ寝」の歌は、共寝をいう歌・恋人に思いを寄せて一人寝る歌・形見と共寝する歌に大別された。共寝をいう「さ寝」の歌には、人麻呂に影響を受けていると考えられる歌が多く存したが、それらの歌は人麻呂の「さ寝」同様に、記紀歌謡・東歌の「さ寝」に見られる集团的・歌謡的性質を持っていない。又、鎌足歌の「さ寝ずは」のように直截に共寝

を希求する歌もない。「さ寝」と表現された背後に、共寝を希求する気持はもちろんあるけれど、記紀歌謡・東歌における「さ寝」の民俗性を脱し、洗練された詩のこぼとして詠まれている。一方、愛する人に思いを寄せて一人寝る「さ寝」の歌は、赤人が旅にあって「浅茅押しなべさ寝る夜は」と離れている家や妻を思っていたように、三七三五・三七六〇は茅上娘子に別れて流されて行く宅守の歌、三六二六は死という世界に妻と隔てられて在る歌で、いずれも愛する対象とは遠く離れてある心情を訴えている歌である。そして、どの歌にも、人麻呂が再び会えることのないかもしれない妻と「「さ寝し夜は」と表現したような愛する女性との共寝の追憶が伴ってあるだろう。

次に東歌を除く作者未詳歌の「さ寝」の歌を列挙しておこう。「さ寝」は総て共寝をいうことばとしてつかわれている（形見と共寝する一首を含む）。

2023 さ寝そめて幾許もあらねば白妙の帯乞ふべしや恋も過ぎねば

2078 玉葛絶えぬものからさ寝らくは年の渡にただ一夜のみ

3874 射ゆ鹿を認ぐ川辺のにこ草の身の若かへにさ寝し子らはも

2520 刈薦の一重を敷きてさ寝れども君とし寝れば寒けくもなし

2528 さ寝ぬ夜は千夜もありともわが背子が思ひ悔ゆべき心は持たじ

2782 さ寝がには誰とも寝めど沖つ藻の靡きし君が言待つわれを

2678 愛しきやし吹かぬ風ゆゑ玉匣開けてさ寝にしわれそ悔しき

2629 既出。

二〇二三・二〇七八は卷十の七夕歌、二〇二三は人麻呂歌集の歌である。人麻呂歌集七夕歌最後の歌の左注に「此歌一首庚辰年作之」があり、庚辰を天武九年とするか、天平十二年と考えるか、又この左注と他の人麻呂歌集七夕歌のかかわりに問題のある歌である。「さ寝」は、共寝をいう恋のことばとして七夕物語にふさわしい。しかし、人麻呂の「さ寝」が長歌の中で、美しい藻の譬喩と共に回想の場面にあつたことを思えば、「白妙の帯乞ふべしや」という恋の生活に密着した表現、「さ寝らくは年の渡りにただ一夜のみ」の逢瀬のままならないことへの悲嘆が民衆の恋歌に近い歌われ方をしている。

三八七四は、類歌に斉明紀の歌謡を持つ。天智天皇・遠智娘の皇子、遂に言葉を口にする事のなかつた建王

薨去に際しての歌である。

射ゆ鹿を認ぐ川辺の若草の若くありにきと吾が思わなくに

土橋寛氏は、右の歌謡及び三八七四の「若」を導く序「射ゆ鹿を認ぐ川辺の若草」について『言別』『全釈』を踏まえ、「初春の狩獵の経験をもっている山民または農民にしてはじめて作りうる」序詞であるとする。この歌の前には、「筑前国志賀白水郎歌十首」があり、この歌も含めて題詞を持たない歌六首の後には、「豊前国白水郎歌一首」「豊後国白水郎歌一首」「能登国歌三首」「越中国歌四首」が続く。「射ゆ鹿を……」の序詞が表わしているように三八七四は民謡を根とする歌である。植物から共寝をいい出す歌い方は、東歌にも見られた（前出三四九七・三五〇四の他に三四〇四・三四九九・三五七七等）民衆歌の方法であつた。

残る「さ寝」の作者未詳歌は、卷十一に集中している。作者判明歌には、女性歌人の名が見られなかつたが、卷十一では、女性による歌として解釈して無理のない歌が多い。実際に女性による歌か、或いは男性が女性の立場でうたったものか、おそらく集団の場においてはうたい手の男女を選ばなかつた歌であろう。個人の抒情としても理解できる歌ではあるが、同時に誰にも共通の

感情を表現している歌として、集団の場において享受されたと考えられる多様性を持つ歌である。

作者の性別の問題、集団性⇨歌謡性という点において卷十一の「さ寝」は、東歌と共通性を持っている。しかし、その歌い方にはあきらかに異なるものがある。東歌では、共寝自体を主題とする歌が多いのに対し、卷十一の「さ寝」は「一重を敷きてさ寝れども君とし寝れば寒けくもなし」とか「さ寝ぬ夜は千夜もありとも」「さ寝がには誰とも寝れど」などと、恋の深さを言うための表現中のことばとしてうたわれている。都の民衆性と東国のそれとの違いであろう。

ここでは「さ寝」の詩的展開を考えたが、赤人・憶良以下の「さ寝」が具体的には必ずしも共寝を意味しないのは、「さ寝」の原性質の変化を表わしているのではない。「さ寝」はあくまで歌垣における共寝をいうことばだという原義を踏襲した上で、歌の詠まれる状況によって、愛する人に思いを寄せながら一人寝ることばとなったのである。

おわりに

東歌・記紀歌謡の「さ寝」から、「さ寝」ということばが、さながら共寝をいうことばであり、「さ寝」の歌の

性格・接頭語「さ」の性格から、歌垣における恋の歌謡の中で共寝をいうことばとして用いられたのではないかと考えてみた。

『万葉集』に接頭語「さ」を持つ語は約三十、百六十首の歌に詠まれている。多く詠まれている語は順に、さ夜・さ雄鹿・さ寝である。又『万葉集』において接頭語「さ」を付されたことばの殆んどは、さよ・さよなか（『万葉集』の歌がそのまま載せられている）を除いて、『古今和歌集』には受け継がれていかない。そうした万葉の「さ」の中には、共寝の床を意味する「さ寝床」が「玉床」とも表現されるように、『古義』のいう真・玉・みなどに通う神聖さを表わす接頭語として考えることのできるものが殆んどである。それは(一)で述べたように「サ」が稲に密接な語であり、霊格を示す玉・みなどに準ずることばであると考えた結論とも一致する。しかし、接頭語「さ」を含む総ての語にそれをあてはめることはできない。例えば、さ遠み(三四二六)さ走る(八五九)さ馴へる(四〇一〇)さ山田(四〇一一)の「さ」をどのよう to 考えればよいか。ただ、(一)において述べたように、霊格を示す語である玉・みが次第に単なる美称としてつかわれることを考えれば、それと同様の「さ」の変化を、先の例外にあてはめて考えることが可能である。それを

追うことができれば、神聖さを表わす接頭とはし難いくつかの「さ」にも解決がつけられるのではないだろうか。それは今後の課題としたい。

ここで忘れてならないのは、歌垣において共寝をいうことばであった「さ寝」の歌を民衆が好んで歌い継いできたことの意義である。冒頭の表に分布を示したように、共寝をいう「寝」や「さ寝」は民衆が好んだことばであった。共寝・一人寝・旅寝をいう「寝」に対して、共寝をいう「さ寝」があったことは、民衆の共寝に対する意識を物語っている。共寝を主題とする歌が民衆歌に多く見られるという数字にその意識は反映している。

「寝」に「さ」を冠した意識の裏には、接頭語「さ」の変化に照応する共寝の意義の変化があることを認めなければならぬ。考えてみれば、古代の民衆にとって何が生におけるよるこびであったらうか。収穫も彼らにとってではよるこびであったかもしれない。しかし、恋にまさるよるこびはなかったのではないだろうか。愛する人の傍に眠るといふ、人が無意識のうちに感ずる充足感を、古代東国の民衆は無意識のうちに「さ寝」と歌い継いできたのだ。日本には、添い寝という育児の風習があった。憶良が「恋男子名古日誦」の中で、両親に添い寝をしてもらおうと「いざ寝よ」とはしゃいでいる幼児の

様子を描いている。成長した人間にとっても、孤独な眠りと、愛する人の傍の眠りとは眠りの質が異なるだろう。恋の交歓・充実した眠り、熟睡うまひも宣長のいうように（前掲『僻説評』）そうした眠りをいうことばであろうか。「さ寝」の原義が歌垣に求められたとしても、特に東国の民衆が好んで「さ寝」の歌を歌い継いできた背景には、充実した眠りに対する精神生活上の希求が隠されているのだろう。しかし、「さ寝」の歌の多くは、共寝のよるこびを歌ったものではなく、共寝のかなわぬ、かなくなったとしてもなお増す恋のかなしさを詠んだ歌であった。

注（著者の敬称を略す）

- 1 武田祐吉『万葉集全注釈』中西 進『万葉集』
- 2 折口信夫「東歌疏」折口信夫全集・第十三卷一八〇頁。
- 3 同右。三三五八は二四頁。
- 4 折口信夫全集・第十四卷「国文学」一四四頁。
- 5 折口信夫全集・第二十九卷「万葉集講義」二二頁。
- 6 中西 進『万葉史の研究』「東方の歌謡」七八五頁―八〇六頁。
- 7 1に同じ。他に土屋文明『万葉集私注』
- 8 本居宣長全集・第九卷『古事記伝』三〇〇頁。
- 9 西郷信綱『古事記注釈』第一卷二四三頁。引用の説話

- は『播磨風土記』揖保郡枚方の条。
- 10 折口信夫全集・第一巻「古代民謡の研究」四八一頁―四八二頁。
- 11 高崎正秀著作集・第四卷一二六頁―一三四頁。
- 12 倉野憲司「言霊の日本の特性」『国語と国文学』第六卷四号六三頁―七九頁。
- 13 (9)に同じ。一四二頁―一四三頁。
- 14 大野 晋『日本語の世界』一三〇頁に「さ」の語根としてさゝ神稻を掲げ、五月・稲少女・稲上りの三語を例としている。
- 15 西郷信綱『古事記注釈』第二卷二三一頁―二三二頁。
- 16 西郷信綱『古事記研究』二六一頁―二六五頁。
- 17 同右。二五八頁―二六五頁。
- 18 A歌に対する美夜受比売の返歌(記二八)
- 19 16に同じ。
- 20 「霍公鳥さ渡る」は、卷十に二例見られるが、そう表現した作者に、鳥類への信仰は最早切実なものとしてはなかったかもしれない。
- 21 土橋 寛『古代歌謡全注釈』古事記編
同右。
- 22 武田祐吉『万葉集全注釈』
- 23 中西 進『柿本人麻呂』一八一頁・二四九頁―二五〇頁。
- 24 頁。
- 25 (21)に同じ。『言別』は橋守部『稜威言別』、『全釈』は

(23)に同じ。

26 嶺ろ、さ嶺の「ネ」に「寝」の感じられる歌(三三七〇・記二四)の「ろ」は愛称であるが、東国民衆の共寝の歌に対する愛着は「ろ」のつかわれ方にも表われている。「さ」は勿論愛称ではないが、民衆の間で歌い継がれていく間に、その原義から離れて「ろ」に近い愛着をこめた接頭語として歌われていた可能性もある。